

SNSによる文字チャットの会話における感動詞の日中対照

楊虹(鹿児島県立短期大学)

1. はじめに

SNSによる文字チャットの会話は、書き言葉でありながら、話し言葉の要素がよく見られる。例えば、相づち、終助詞、くだけた表現、擬態語・擬声語、感情を表す感動詞などが挙げられる。本研究は、感動詞に注目し、中でも、話し手の感情や、評価的スタンスを示すものではなく、話し手内部の情報処理状態を表す感動詞を取り上げる。

音声会話において、話し手内部の情報処理状態を表す「あ」「えっと」などの感動詞は、急に何か思いついたことや、発話の内容を考えている最中であることなどを示し、それらによって、会話の方向性を具体的な内容を話す前に相手に知らせる(田窪・金水 1997)機能を持つ。音声会話に見られるこれら感動詞の機能は、同期の相互行為を前提としたものであり、すなわち会話の方向性をその場その場で互いに調整しながら進める際、発話する瞬間における発話者の情報処理の状態を表す感動詞を使用することによって、相手が会話の方向性を認識しやすくなる。では、基本的に非同期状態にあるSNSの文字チャットの場合でもこれらの感動詞は同じ役割を果たすのか。本研究では、典型的な話し言葉の一つである「感動詞」に着目し、日本語と中国語のSNSによる文字チャット(LINE・Wechat)での会話において、話し手の内部の情報処理状態を表す感動詞の使用について分析し、日中それぞれの文字チャットの会話の特徴を明らかにする。

2. 先行研究と本研究の対象

本章では、感動詞の分類について先行研究を整理し、本研究で分析対象とする話し手内部の情報処理状態を表す感動詞に相当するものが何かを示す。田窪(1995)では、感動詞を心的情報処理の操作に関わる標識という捉え方で、二つのタイプの感動詞、すなわち「入出力制御系」と「言いよどみ系」を指摘した。前者は、対話相手の発話を話し手がどのように処理しているか、あるいはしたかを示すもので、後者は、検索、演算、編集などに関する作業バッファの管理に関する心的モニターとして捉えられ、作業記憶の性質と関係するという。

富樫(2001)は、田窪の「入出力制御系」感動詞を、「あ」系、「ふーん」系、「はい」系に分け、より詳細に分析している。「あ」系は情報の書き込みという一次的処理を示すが、1モーラで音声閉鎖音を伴う場合が多い。また、「あ」と「え」「お」の機能に違いがみられ、「え」「お」には、話し手の情報に対する評価のニュアンスが聞き手に伝わる。また、「ふーん」系は、獲得した情報を、話し手の評価とともにデータベースに書き込むという二次的な処理を示す。そして、「はい」系は応答の側面が強く現れる。富樫(2001)の分析から、単純な情報の獲得を示し、話し手の評価的ニュアンスを伴わない感動詞は「あ」のみであると考えられる。

一方、「言いよどみ系」は、「ええ」「あの」「ええと」「まあ」¹などの感動詞でフィルターとも呼ばれている。田窪(2002)では、これらの感動詞は、発話権保持と関わるが、スピーチなどにも多く見られ、発話処理の速さと相関しているという。また、「あの」と「ええと」については、どちらも発話の産出に時間がかかることを示すが、前者は情報処理において適切な表現を検討していることを示しているのに対し、後者は発話内容について検討中であることを示すという違いがある(定延・田窪 1995)。また、山根(2002)は、「あ」や「はい」等も含めてより幅広くフィルターを捉えており、その役割は、情報処理、テキスト構成、対人関係という3点に関わると指摘している。ただし、山根(2002)によると、上述の「あ」「えーと型」は、情報処理ではなく、「テキスト構成」及び「対人関係」に関わるという。しかし、定延(2005)では、感動詞「あの」を例に、その働きを「自分の心の状態を相手にあからさまにしている」と指摘してとおり、本研究は、情報処理の操作に関わるこれらの感動詞の使用は、同時に対人関係にも関わりうるという前提で論を進める。

一方、中国語では、感動詞の研究は少なく、感動詞を情報処理の操作に関わる標識として捉えて分析した研究は楊・中川(2014)のみである。楊・中川(2014)は、感動詞(感嘆詞)を1感情表出、2働きかけ、3認識の変化を示すという3つに分類し、そのうち「認識の変化を示す」という機能は、田窪(1995)等で用いる心的情報処理の操作と同じものを指していると考えられる。楊・中川(2014)は、中国語の「啊“a”」「唉/歎“ai/ei”」「哦“o”」には、日本語の情報の単純獲得を示す「あ」と同様の用法があると指摘している。ただし、中国語のこれらの感動詞は「同じ語形で異なる複数の

¹ 「まあ」「なんか」等副詞から転じたフィルターは、それ自体が感情や命題に対する評価的態度を伝えるため、本研究では対象としない。

語彙と機能を担う、未分化の状態」であるため、同時に「え」や「お」などとも対応し、意外や賞賛など複数の語意を持つとも指摘している。

また、中国語の言いよどみ系には、非語彙的要素で、母音の引き延ばしや相づち、応答としての機能も持つ「嗯」のほか、指示詞から転じた「这个」「那个」、副詞から転じた「就是」がある。楊 (2009) は話題導入におけるこれらの言いよどみ表現の使用を指摘しており、また、姚 (2012) は、副詞から転じた「就是」の場つなぎの機能と注目喚起機能を指摘している。

本研究では、情報処理の操作に関わり、感動詞自体では特定の感情表出や評価的表現として用いられないものの中比較を行うため、入出力制御系の「あ」、「啊“a”」「唉/歎“ai/ei”」「哦“o”」、言いよどみ系の「えーと」(「うーん」「うんと」)「あのう」(「そのう」)、「嗯」(相づちでない場合)「这个/那个」「就是」を分析対象とする。ただし、入出力制御系のうち、相手の発話から新規情報を獲得したことを示す「応答」(楊・中川 2014)の「あ」及び「啊“a”」「唉/歎“ai/ei”」「哦“o”」²は、相づち的表現としても捉えられるため、分析対象としない。

これらの感動詞は、自らの発話を産出するまでの情報処理の状態をその瞬間において相手に示すもので、会話において相互行為のリソースとして利用されるが、非同期的な会話である SNS チャットにおいては、その場で相手がメッセージを見るとは限らず、命題内容を含む発話と同時に一気に見る場合も多いため、これら感動詞本来の働きが弱まる可能性が高い。しかし、実際のチャット会話において、「えーと」「あー」などのフィラーが多く出現しているとの報告もある(岡本 2016)。これらのフィラーを、石黒 (2007) は、「文字によってあたかも声が聞こえるかのような雰囲気を出す方法」(石黒 2007)の一つであり、即興的表現として捉え、このような「不整とも思える表現」を、書き言葉で取って入れることにより臨場感を高める役割を持つと指摘している。はたして、SNS チャットの会話におけるこれらの感動詞の役割は、臨場感を高めることだけであろうか。また、中国語のチャットにおいても、これらの感動詞が同様に多くみられるのだろうか。この研究では、感動詞の使用実態の分析から日本語と中国語のチャットのコミュニケーションの特徴の一端を明らかにすることを目指す。

3. 目的と研究方法

本研究では、日本語と中国語の SNS による文字チャットでの会話において、発話者の情報処理の状態を表す感動詞の使用実態を明らかにすることを目的とする。データは、日本語と中国語のチャット(女性、19~27歳)の会話履歴(日本語 10 組、中国語 12 組)で、自然会話である。日本語母語場面の会話提供者は学生(大学、短大、専門学校)または社会人である。中国語母語場面の会話提供者は、中国在住の大学生または社会人及び日本在住の中国人留学生である。データは一回の送信を 1 メッセージとし、各組のメッセージ数は 300 以上で、日本語計 4333、中国語計 4102 メッセージである。

分析は、まず該当の感動詞の生起頻度を分析し、次に、生起する文脈を分析し、談話展開及び相互行為上の生起位置から分析を行い、チャットにおける役割を考察する。なお、チャット会話において、音声で表現する際に記号類の使用が多くみられ、本研究において、「あ！」は 1 モーラの「あ」とみなし分析対象とする。また、「あ〜」は、2 モーラの「あー」に相当すると捉え、対象外とする。

4. 結果と考察

4.1 生起頻度

分析の結果、日本語では、「あ」「あっ」「あ！」等入出力制御系が 39 回、「んー」(または「んーと」)(7)「うーん」(4)「えーと」(または「えっと」「えっとね」)(4)「あの」(1)などの言いよどみ系が 16 回見られた。それに対し、中国語では、「哦 /o/」(2)、「啊 /a/」(1)の計 3 回みられ、言いよどみ系はみられず、日中において使用頻度に大きな差が見られた。

音声会話におけるこれらの感動詞の使用頻度について、楊 (2009) は、話題開始における「認識の変化を示す表現」、「言いよどみ表現」を分析したところ、日本語と比べ、中国語では使用頻度が低かったとしている。ただし、楊の分析は話題開始部に限っており、会話全体における日中の比較をしていない。また、葛・松村 (2017) では、テレビ番組(インタビュー)の会話における「「あー」と「那个」を分析した結果、総発話数における使用率では、中国語は日本語の半分以下であると報告している。感動詞の日中対照研究そのものが少ないため、音声会話における日中の使用傾向について、まだ断言できないが、本研究の結果からは、話し手の内部の情報処理状態を表す感動詞は音声会話でみられた差以上に、中国語のチャットでは、ほとんど用いられないことがわかった。

² 中国語のこれらの感動詞は単純獲得のほか、話し手の驚き、不満などの感情を表出する場合がある。それらは本研究では対象外とする。

4.2 生起する場面

4.2.1 入出力制御系

入出力制御系は、外部から新規の情報の入力があった場合や想起したことを示すのに用いられるものであるが、談話展開における話題の管理に関わることも指摘されている（楊 2006 など）。本研究では、談話展開を質的に分析した結果、話題管理との関わりから表 1 のとおり 4 つの異なる場面に生起することがわかった。日本語ではすべて見られたが、中国語では、会話継続中でのみ使用がみられ、会話再開における使用はみられなかった。

表 1 入出力制御系感動詞の生起場面の日中比較

| | 会話継続中 | | 会話再開（30 分以上の間隔あり） | | 計 |
|---|-------|------|-------------------|------|----|
| | 話題継続 | 話題転換 | 話題継続 | 話題転換 | |
| 日 | 28 | 6 | 3 | 2 | 39 |
| 中 | 2 | 1 | — | — | 3 |

日本語の「あ」は、現在進行中の話題に関するなんらかの事柄を想起した際に用いられるものが最も多くみられ、会話進行中の新規話題の導入における「あ」は、それまでの会話の流れと関連性を持たない急な話題の導入に用いられるストラテジーとして、音声会話でもよくみられ、発話者の「今、現在」の認知状態を示し、会話の一貫性を保つ装置である。一方で、発話が線形的に流れて消えていく音声会話と異なり、文字を媒介するため、ログ画面にメッセージが残るチャットの会話ならではの「あ」の使用もみられた。それは、「あ」を 1 メッセージとして単独で送信し、続くメッセージで新規の話題を導入するというものである。ここでの「あ」は、唐突な話題転換を行う際に、先行話題との間に視覚的に話題の境界を示す役割を果たす。

会話中断後の会話再開の場合、先行話題を継続する場合と話題転換を行う場合がある。「あ」の使用によって、一旦終了した会話が瞬時に適切に再開される。LINE の会話では、メッセージのやり取りが途切れた場合、会話が終了したのか、まだ続くのか、その判断が難しい。西川・中村（2015）では、LINE の会話は、中断した場合、ログ画面があるため、間断なく会話が続いていたかのように再開することができると指摘している。西川・中村（2015）では、深夜に途絶えた会話を、何らのマーカーも用いずに再開する例が挙げられているが、それは先行話題について未決の事柄について質問するという場面であった。本研究では、「あ」を用いる場合、一旦終了した会話に関連する事柄を、今現在気づいたこととして示すことによって、瞬時に会話を再開し、直前の話題を継続することができる。会話再開と話題転換を同時に行う場合は、「あ」+話題転換を示す接続表現を用いて、中断した会話の再開と新規話題の導入を一回の送信で行うことがみられた。会話を途絶えた後の新規話題の導入を新たな会話の立ち上げより、あたかも一続きの会話であるように見せかけるのに「あ」が用いられる。

以上のように、日本語のチャットにおける「あ」は、チャットという「記録性のある」メディアの特性をリソースとして、会話の流れをわかりやすく示すことにも用いられ、会話を、一貫性を保ちながら瞬時に再開したり、話題転換を行ったりする役割を担う。一方、中国語のチャットでは、一か所のみ新規話題を導入した例がみられたが、基本的には、感動詞によって、話題の転換や会話のつながりを示す必要がない。中国語では、会話の一貫性を保つ装置として感動詞があまり用いられないことが示唆される。

4.2.1 言いよどみ系

日本語のチャットにのみ生起した言いよどみ系感動詞についてみると、最も多くみられたのは、相手の質問または情報要求のメッセージの後に送信するもので、本研究では応答型とした。また、数は少ないものの、質問などに対する応答でない場合、すなわち非応答型もみられた（表 2 参照）。

表 2 日本語の言いよどみ系感動詞の生起場面

| 生起形式 | 応答型 | | | | 非応答型 | | 計 |
|------|-----|-----|-----|---------|-----------|-----|----|
| | あの | うーん | えーと | んー（んーと） | えっと（えっとね） | うーん | |
| 生起数 | 1 | 3 | 2 | 7 | 2 | 1 | 16 |

言いよどみの音声会話における基本的な機能は「検討中」を示すものであり、チャットにおいて最も多く生起した応答型は、相手の質問に回答する前に、検討中であるという特定の心的操作状態を伝えるものである。実際に即答できず、言いよどみの後、挿入連鎖の第一発話（修復）が産出される場合もみられれば、質問に対する否定的な応答が産出される場合もある。

一方、非応答型では、相手をからかったり、相手の発話内容に対して否定的なことを述べたりする場面でみられた。こ

のうち2回は「えーと」系である。「えーと」について、定延・田窪（1995）は、聞き手が存在する場合、「えーと」は「話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時的に遮断する宣言として働」き、「慎重にいろいろ考えている（そのために頭の中の余計な情報を追いやっている）」という態度を表すのに効果的である。こういった態度の表出が、発話のぞんざいさ・さしでがましさを回避する」と指摘している³。上記定延・田窪（1995）の指摘は、音声会話における隣接ペアの第二発話での生起を想定したものであり、本研究の応答型における言いよどみの働きの説明に有効である。音声会話において、「インターフェイスの一時的遮断」という時間の経過は話し手と聞き手により共有されているが、さらに、産出の際の話し手の表情や、イントネーション等非言語、パラ言語的要素が加わり、はじめて話し手の「慎重にいろいろ考えている」という態度が伝わる。一方、チャットでは、相手の質問への応答という文脈ではなく、さらに「話しにくそうにしている」非言語、パラ言語的要素が欠如し、話し手の「慎重にいろいろ考えている」という時間は聞き手には共有されていない。そこで「えーと」の送信は、これから「ぞんざいな・さしでがましいこと」を言うよというあからさまな予告ではあるが、「ぞんざいさ・さしでがましさ」の軽減にはならない。そこで、ここでの言いよどみがからかひの文脈の構築における一種のお膳立てのような役割を果たす。

中国語のチャットでは、相手を責めたり、からかったりする場合においても言いよどみによる前置き・予告なく行っている場面がみられた。言いよどみは音声会話における「不整表現」として回避されていることが推察される。

5. まとめと今後の課題

本研究は、日本語と中国語のSNSチャットの会話における情報処理の操作に関わる感動詞の分析を行い、日中両言語の相違を明らかにした。分析の結果、日本語では、入出力制御系が比較多くみられ、言いよどみ系も一定数みられた。日本語のチャットの会話において、音声会話で指摘されている情報処理に関わる心的操作の状態を示す機能、談話展開や対人関係に関わる使用がみられたほか、話題の境界をビジュアル的に示したり、からかひの文脈をあからさまに予告したりする文字チャットならではの使い方もみられた。一方、中国語のチャットでは、感動詞の生起数が少なく、文字チャットならではの使い方はみられなかった。日本語と中国語のコミュニケーションスタイルについて、音声会話を対象とした研究では、さまざまな知見がみられたが、SNSの社会的浸透により、今後、日中間のSNSを使用した文字チャットによるコミュニケーションも増えていくことが予想され、この分野における両言語の特徴の解明が待たれる。本研究は感動詞の使用という切り口から両言語の会話のスタイルの違いをある程度明らかにしたが、今後データを増やして、分析の精緻化を図ってきたい。

謝辞 本研究は科学研究費基盤研究(C)「LINEをプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築」(平成28年度～30年度課題番号:16K02803 研究代表者:佐々木泰子)による研究の一部である。ここに感謝する。

参考文献

- 岡本能里子(2016). 雑談のビジュアルコミュニケーション—LINEチャットの分析を通して 村田和代・井出里咲子(編) 雑談の美学: 言語研究からの再考 ひつじ書房, 213-236
- 葛欣燕・松村・瑞子(2017). 指示詞型フィラーの用法についての日中対照分析: 日本語「あのー」と中国語「那个nage」の機能を中心に 言語文化論究, 38, 41-58
- 小出慶一(2009). 「えーと」再考—談話運営という観点から 埼玉大学紀要教養学部, 45(1), 45-57
- 定延利行(2005). ささやく恋人, りきむレポーター 口の中の文化 岩波書店
- 田窪行則(1995). 談話における心的操作モニター機構: 心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」 言語研究, 108, 74-93
- 田窪行則・金水敏(1997). 応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会(編) 文法と音声 くろしお出版 pp. 257-278.
- 富樫純一(2001). 情報の獲得を示す談話標識について 筑波日本語研究, 6, 19-41
- 楊虹(2006). 「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』8, 327-336
- 楊虹(2009). 「中日接触場面における話題転換の研究」, 博士学位論文, 1-167
- 楊虹・中川正之(2014). 中国語と日本語の感嘆表現 日中言語研究と日本語教育, 7, 50-60
- 山根知恵(2002). 日本語の談話におけるフィラー くろしお出版
- 姚双雲(2012). 自然口語中的関連標記研究 中国社会科学出版社

³ 定延・田窪（1995）に対し、小出（2009）は、談話運営というより上位の行動と関わりと異なる見解を述べているが、本研究のデータではこの機能はみられなかった。